

第12回東亜総研月例セミナー講演録

日 時：平成27年4月30日（木）13時30分から15時まで

場 所：東京都千代田区麹町4-1-1 麹町ダイヤモンドビル9階 株式会社レコフ会議室

講 師：駐日ラオス人民民主共和国 特命全権大使 ケントン・ヌアンタシン閣下

テーマ：「日・ラオス友好協力60周年及び新時代の協力関係」

<講演録>

司会：まず開会にあたりまして、当財団の代表理事会長の武部勤からご挨拶いたします。

武部：皆さん、こんにちは。連休を挟みまして、本日の第12回月例セミナーを開催しましたところ、このように大勢お集まりいただきまして、大変驚いています。心から感謝とお礼を申し上げます。本日の講師には、駐日ラオス人民民主共和国特命全権大使のケントン・ヌアンタシン閣下をお願いをいたしました。日本とラオスは、今年外交関係樹立60周年の記念すべき年を迎えております。ラオスは、私が自民党幹事長時代に、同僚の国会議員と一緒に参りましたが、特に私が印象を強くしたのは、ルアンパバーンという古都でございます。本当に、お母さんの体内というのはこんな感じかなと思うぐらいに癒されるものを感じました。皆さんの中には、首都ビエンチャンにはお出でになった方も少なくないだろうと思いますけれども、ちょうど日本列島と同じくらいの面積であるラオスという国は、私達があまり知らない、しかし非常に魅力的な国であると思います。ぜひ本日は、ケントン大使閣下からラオスという国について我々の知られざることを教えていただくと同時に、日本とラオスの関係や大使閣下が日本に対して期待していることなどについて、お話をお願いしたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

司会：それでは、ケントン・ヌアンタシン大使閣下よりご講演いただきます。ラオスはインドシナ半島中央に位置し、ASEAN10ヶ国の中で唯一の内陸国であり、タイ、ベトナム、中国等と国境を接した鉱物・森林資源の豊かな国です。近年ラオスでは、タイとベトナムの間に位置する好立地を生かして、経済特区や工業団地の整備が進み、日系工場の進出が本格化しています。また、2015年は日本とラオスの外交関係樹立60周年記念の年であり、様々な事業・イベントが両国において予定されております。本日はケントン・ヌアンタシン大使閣下より、日本・ラオス両国の政治・経済・文化交流や日本に対する期待、今後の両国関係について、「日・ラオス友好協力60周年及び新時代の協力関係」と題してお話を

いただきます。ケントン・ヌアンタシン大使閣下のご経歴はお手元の資料をご参照ください。それでは、ケントン・ヌアンタシン大使閣下、どうぞよろしくお願いたします。

ケントン大使：皆さん、こんにちは。このような素晴らしいゲストの前でお話させていただくのは大変光栄です。今日は武部会長からラオスについてお話をくださいというリクエストを頂戴しましたが、皆さんの方でラオスの何がお聞きになりたいか伺いたないので、まず皆様の方から三つの質問をいただいてもよろしいでしょうか。

村田評議員会議長：東亜総研の評議員会議長の村田と申します。日本は島国ですから、陸上で他の国と接しているところはないわけですが、ラオスはそれと全く違って、中国、ミャンマー、ベトナム、カンボジア、タイと陸地で接しています。そのランドロックの国として、これまでは大変色々な意味で交通の便とか運輸の面で困難をきたしていたと思いますが、最近周辺諸国も大変経済が発展してきたわけで、今までの困難性というものを有利にするという可能性を秘めていると思います。これまでの困難性と、将来に向けて5つの国と国境を接しているという点をどのように有効に生かしていくかということを伺いたいと思います。

武部会長：今ラオスで一番困難な問題は何ですか。それに対して、どのように克服していたらよいですか。また、日本にできることは何ですか。

会場：多くの国と国境を接しながら必ずしも交通が便利でないということで、ある意味で20世紀の欧米の文化、あるいは経済の行き過ぎによって起こる様々な混乱、絆の分断、ラオスが大切にしている国民性、文化の特徴を教えていただくとありがたいと思います。

ケントン大使：ありがとうございます。三つの質問をいただきましたので、プレゼンの焦点が見えてまいりました。本日のプレゼンを少し再構築しまして、前半は用意した資料を駆け足で見て、後半にご質問いただいた経済の話、日本とラオスとの関係について焦点を当てていきたいと思います。

ラオスの国土面積は 236,800 km²で、日本の本州とほぼ同じ大きさです。山が多い国で、何とんでもメコン川が流れており、その分流がたくさんあります。ASEAN 諸国と比べて森林面積が多く、国土の4割以上が森林です。ラオスは肥沃な土地や鉱物資源に恵まれており、水・森林資源もたくさんありますので、今後の農業開発、工業開発、水力発電開発にポテンシャルがあると思います。人口は650万人ですが、今年国政調査があるので、650万人を少し上回るかもしれません。民族の種類は49で、ここが重要ですが、49の民族がそれぞれ違う生活様式を送っています。人口密度は1 km²あたり26人、経済成長率は2.3%、

労働力は現在 300 万人を少し超えたところで、宗教は国民の 95%が仏教徒です。ラオスには国境が 5 つあり、5 つの国に囲まれている内陸国です。そのため、交通が大変困難で、交通が整備されていないため、世界の多くの人々はラオスのことをよく知りません。内陸国のため、接続性が悪いという状況を打破するために、政府はランドロック（内陸）ではなく、「ランドリンク」というキーワードを使い、国々をつなごうという発想から、北の中国、南のタイ、カンボジアに至る南北経済回廊、ベトナムからタイに向かう東西経済回廊を整備しようとしています。南北や東西を結ぶ道路はありますが、現在この道は自動車のためのものであり、鉄道が走っていないことがラオスの大きな障害です。歴史について詳しくは省略しますが、これまでで一番有名だった王国は、1353 年から築かれたランサン王国で、メコン下流で広がった一族です。ランサンには「100 万の像」という意味があります。現在は 100 万頭もいませんが、像はもちろんまだ生存しています。昨年、日本ラオス国交樹立 60 周年を記念して、ラオスから 4 頭の象を京都の動物園に寄贈させていただきました。あと 12、13 年経てば、この 4 頭の子どもの像から、ラオスの像がまた日本で生まれることを期待しています。8 ページは伝統的なラオスの住宅様式です。1 階が吹き抜けになっていて、機材・機具、時々お米を置くこともあります。2 階に住居部分を定めていたのは、昔のことですが、虎対策です。10 ページはラオスの女性の民族衣装ですが、49 部族ありまして、各民族が違う衣裳を持っています。よって、ここに写っているのは 49 部族のたった一部です。11 ページは結婚衣装で、今だにこういった衣裳で結婚式をしています。昔は本物の金を衣裳に縫い込んだそうですが、今ではそうではないかもしれません。しかし、裕福な方は本物の金を用いているそうです。12 ページはラオの楽器で「ケン」と言います。同じような楽器をタイの北部でも奏でるそうですが、ラオスのケンが元になっています。13 ページに写っているのはケンの音が好きなアメリカ人です。ラオス人のケン奏者は弾くこともしますが、伝統的な民族の歌も歌うことができます。14 ページは「ラナトラオ」と言いまして、皇室で今でも演奏されている楽器です。15 ページにはラオスの言語と文字が書かれていまして、字自体は「ラオス人民共和国」と書いてありますが、子音が 34、母音が 32 あります。17 ページは「バーシーの儀式」といいますが、結婚式はだいたいバーシーの儀式も伴っています。この儀式をつかさどる人間が、カップルの指と指とを糸で結び、彼らの健康と豊穰を願います。19 ページはお迎えの儀式ということで、皇太子さまがラオスにいらっしゃった時のお出迎えです。23 ページは主食で、中のもち米を食べます。ラオス人はもち米をゆでるのではなく、蒸して食べます。25 ページも人気のあるもち米で、黒

米です。炊くと赤くなります。26 ページはラオの食べ物で「ラブ」と呼ばれていますが、食べると幸先が良いと言われており、人気のある食べ物です。27 ページは特に若い人に人気のある「タンマークーン」というパパイヤのサラダです。28 ページはラオスの鳥の調理法です。30 ページは「カオラーム」といって、竹の中にお米を詰めて外から焼いて食べるものですが、中に竹の香りが移って大変良い香りです。32 ページはラオスのビール、「ビアラオ」です。とても人気のあるもので、代々木公園でビアフェスティバルを行うと、日本人からも常に人気の的でした。本年の5月23日・24日に代々木で行われるビアフェスティバルでもまた人気が出ると思いますので、どうぞお越しください。ラオスは年間300万人もの観光客をお迎えしており、人口650万人に対して大変良い数字であると考えております。また観光地として、行き先が大変多くあります。タートルアン、ワットシエントーン、ワットポー、あとはジャール平原等がありまして、34 ページでご覧いただいているのはタートルアンで、中には仏様の彫刻が施されています。35～36 ページはタートルアンのお祭りです。タートルアンでは9月に大例祭というものがありまして、昔は10日から15日ぐらい続きましたが、最近は5日から7日くらいとなっています。37 ページはルアンハバーンにありますワットシエントーンで、昔の様式で建てられています。恐らくルアンハバーンの建築様式と周りの景観が合ったおかげで世界遺産になったものと思います。38 ページはワットシエントーンの仏様です。39 ページはジャール平原の写真です。ご覧いただいているのは、石でできた大きな壺ですけれども、この壺は誰が作ったのか未だに謎が残っています。写真で壊れた壺が写っているのは、アメリカ軍に爆撃されて破壊されたものです。40 ページは私の写真です。比較として置きましたが、自分の背よりも高い壺です。42 ページはお寺ですが、もともとは3世紀に建築されまして、ご覧いただいている現状のものは11世紀に建て直されたものです。こちらもユネスコの世界遺産に指定されています。

経済の話に移ります。43 ページは2013年度から2014年度のデータですが、わが国は小国ですので経済も比較的規模が小さく、GDPは110億米ドルを少し超えたところです。国民1人当たりGDPは1,692米ドル、GDPに占める各分野の割合は、農業は24.4%、産業28.4%、サービス39.2%です。インフレ率は6.2%、為替は1米ドル8,000キープです。44 ページの貿易ですが、輸出は1,600億米ドル、輸出品としては電気、鉱物資源、織物、木製品、農業製品で、輸入は約1,900億米ドルです。45 ページの投資総額は、224億米ドル、内訳として国内投資が22億米ドル、対外投資が90億米ドル、合弁事業が111.6億米

ドルです。2013年度に日本は大きな投資国として99のプロジェクトのうち4億500米ドルの投資をしてくださり、ラオスの第7位の投資国となりました。ここからが質問の答えになるかと思いますが、毎年私たちはセミナーを日本各地のいろいろな都市で開催しています。日本のビジネスマンにラオスに投資をしていただきたいというのが大きな希望です。タイプラスワン、中国プラスワンといった形で日本の投資はずっと増えてきています。特に日本企業に対しては、ラオスの中央部にあるサバン・セノ経済特区に投資をしていただけないかとお声掛けをしています。ラオス政府では10の経済特区を作っており、そのうち6箇所がすでに稼働を始めています。ラオスはいつも5大国の心臓部に立地していて、メコン川の20以上の分流が全てラオスを起点として流れています。東南アジアを見渡すと、ラオスは一番後進発展国です。東南アジア諸国の援助を得て、ベトナムからラオスを經由してタイに向かう東西経済回廊、そして中国からラオスを通してシンガポールに至る南北経済回廊を作っていただいています。水が豊富にあるということは農業にとってはよかったのですが、海の交通がないのは障害でした。1994年前にはメコン橋がまだ架けられていませんでした。最近ではメコン川にかかる橋が6つまで増えていまして、例えばラオスからタイやベトナムに至るものがあります。友好関係について、日本と国交を樹立したのが1955年3月5日で、それ以来友好的かつ協力的な関係を保っています。初代首相のカイソン・ポムウィハーン氏が1989年11月に来日しました。建国後初めてのカイソン・ポムウィハーン首相の外遊でしたが、その最初の外遊先に日本を選び、日本を訪れ、門戸を開く決意をしました。それ以来、ほぼ全ての首相が来日しています。ラオスと日本との関係において特に申し上げたいことは、2011年には両国の間で包括的パートナーシップを宣言しました。包括的パートナーシップを組ませていただいたのが、当時のカムタイ・シーパンドーン首相でしたが、2015年3月に現在のトーンシン・タムマヴォン首相が60周年のお祝いで来日したときに、両国の関係を包括的パートナーシップから戦略的パートナーシップにアップグレードさせていただきました。ですので、どの階層においても、ラオスと日本は友好的な関係が築かれていると思います。日本の要人でラオスに訪問いただいた方々を列挙させていただきますと、最初に日本の首相として来ていただいたのが1957年の岸信介首相、その後1999年に秋篠宮ご夫妻、2000年に小渕恵三首相、2004年に小泉純一郎首相、2012年に皇太子殿下、野田首相、2013年には安倍首相も来ていただきました。ラオスと日本との関係は、あらゆるレベルでの協力が進んでいます。要人の行き来は定期的ですし、政治的安全保障の面でも、まず日本の防衛省がラオスの陸軍士官を受け

入れてくださいます。日本の防衛大学校にラオスの士官が行っています。経済貿易投資に関しても、徐々に大きくなっています。日本はラオスに対して ODA 提供国としては一番大きな援助国で、年間 1 億米ドルをいただいています。日本から頂戴した ODA は主に道路、橋、空港建設に使われています。教育面では日本政府がラオスの学生に対して奨学金を提供して下さったり、小学校を建設して下さったりしています。しかし、ここで特に申し上げたいのは、日本の民間人の方々が募金をしてラオスに小学校を建ててくださることもありました。日本の皆様にとってはラオスの小学生が一昔前の日本に似ているということで、色々と援助をいただいています。人材開発に関しても多くの援助をいただいております。特に政治系や技術系の人材開発、あるいは学生の受入れなど、色々な援助をいただいています。文化交流に関して、音楽コンサートの交流は毎年定期的にあります。今年には特に国交樹立 60 周年ということで、ラオスから京都市動物園に像を 4 頭寄贈させていただきました。それに対して「ありがとうコンサート」を開催していただいたのに加え、日本からラオスに桜を持ってきて、「桜ガーデン」というものを作っていただきました。この「ラオスありがとうコンサート」は京都で開催されましたが、動員人数が 1,700 人と大変大きな賑わいのある会となりました。今や 4 頭の像がラオスから京都に来たものですから、京都ではラオスが非常によく知られるようになりました。像は非常に人気を博しております。一般の人から名前を募集して日本語の名前がつけられたとのこと。

ここからは、ラオスと日本との関係で今後どういったことを期待するか、どういう風に発展するかということに目を転じたいと思います。ラオスは日本を非常に大事な国と考えており、日本から得られる協力を非常に大事であると思っています。この二国関係を非常に大事と捉えているために、政治の分野、安全保障でも日本に対して協力したい所存です。特に政治や安全保障に関しては、二国間だけの協力にとどまらず、アセアン地域、あるいはメコン流域地域、そして国連のような世界的な場においても協力しています。経済協力では、できる限り日本に協力したいと考えており、この経済協力を更に進めて一步上の協力に高めていきたいと考えています。貿易投資に関して、貿易の量はさほど大きくはないのですが、投資は順調に伸びています。ラオス政府としては、日本企業にできる限りラオスへの投資をお願いしたく思います。特に日系企業には経済特区で何らかのビジネスを運営していただきたく、優遇政策も実施しています。今後の成長産業は水力発電、鉱業、農業ですので、投資家の皆様はそういった分野に着目されるとよいのではないかと思います。もちろんサービス、特にロジスティクス関係でも多くの投資をお待ちしています。人材交

流に関しては、若い方々や留学生との良い交流ができるよう、政府として促しています。域内あるいは国際協力の面で、ラオスは日本政府に一貫して支援していただけてきましたので、ラオスとしても日本政府が例えば国連安保理での議席が確保できるよう、一貫して支持したい所存です。日本が国際舞台あるいは地域的なフォーラムといった舞台の中で積極的に力を発揮できるよう、ラオスがどのようなサポートをできるか、いろいろなフォーラムを通じて考えています。私達には、どのようにラオスを豊かな国にするのか、貧困国から脱却するのかという大きな問題があります。いまだにラオスは国連の最貧国リストに入っており、後発発展途上国の位置を堅持しています。ラオス政府としては、国が貧困から脱却する目標年として2020年をターゲットに設定し、その達成のために5年計画を立てています。ラオスの潜在力から経済成長を考えると、少なくとも8%成長が必要であると政府は計算しています。去年は8%成長が未達で、前年対比で7.5%成長しか達成できませんでした。インフラ、特に交通を改善していかなければなりません。ご存知のとおり、中国と交渉し、新幹線のようなものを通そうということで、ラオスと中国の国境から首都ビエンチャンにつながり、そして一般鉄道でタイのほうに繋がるということを考えています。現在非常に有望なのが水力発電事業で、政府は非常に尽力し、水力発電所は現在16機存在しています。2015年末までにプラス5機、2020年までにプラス10機できる予定です。昨年、ラオス、タイ、マレーシア、シンガポール4ヶ国のエネルギー庁長官が集まり、MOUに署名して電力をラオスからシンガポールに送ることが決まりました。様々な機会がありますので、平等、ウィンウィンの原則に則り、ラオスに皆様から投資いただけたらと思います。本日はありがとうございました。

司会：ありがとうございました。ここで当財団評議員会議長村田吉隆より、閉会のご挨拶を申し上げます。

村田：皆さん、本日は連休中のご計画が多々おありだったと思いますが、当財団の月例セミナーにご出席いただきましてありがとうございました。ケントン・ヌアンタシン特命全権大使には、ラオスについてあらゆる側面からのご紹介をいただきまして、本当にありがとうございました。駐日バーレーン王国特命全権大使のハリール・ビン・イブラヒーム・ハッサン閣下にもご参加いただきまして、心から御礼申し上げます。私はラオスには行ったことがありませんが、かねてより大変興味を持っておりました。私は45年前、北京の日本大使館に勤めていたことがあるのですが、現地の飛行場に行ったときにいつも見ていたのが当時のラオ航空という航空会社のマークで、この飛行機に乗ればビエンチャ

ンに行けると思っていました。当時はラオ航空の飛行機の鼻翼に像のマークが書いてあったと思います。そういう意味で、私のラオスに対する印象はまさに「像」でした。60周年の外交関係を祝して、京都の動物園に4頭もの像をいただいたことに対して、心から感謝を申し上げたいと思います。ラオスと日本との関係をもっと親密にするためには、我々がラオスについてもっとよく知る必要があると思います。その意味で、本日は大変貴重な機会となったと思います。できましたら、二国間を結ぶ直行便の開設が早くできることが一番良いのではないかと思っています。最後に一つ付け加えさせていただきますと、ラオス語には32の母音と34の子音とがくっついた発音がどうなるのか、私には想像ができません。日本語には母音が5つしかないことを考えますと、つくづくそう思います。色々な意味でのラオスに対する興味をますます深くし、今後ともラオスと日本とがもっと親しい関係になることを希望して、私からの閉会のご挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。

司会：以上をもちまして月例セミナーを終了させていただきます。本日はありがとうございました。
(了)